

# 有識者ヒアリング調査 結果ポイント(中間報告)

## 1. 調査概要・調査対象

本市が目指すヘルスケアの振興にむけた可能性や課題、推進方策等についてご助言を頂くことを目的に、本協議会委員やオブザーバを中心に、ヘルスケア分野の有識者やその他関係者等にヒアリング調査を行った。

今回は、第1回協議会終了後に実施したもので、施策・事業アイデア等について重点的にご意見を伺ったものである。

## 2. 調査結果 (ポイント)

### 生かすべき蒲郡市の強み、特色

#### 【1】温泉等の公有資産の活用

- ・温泉等、蒲郡の特色を活かしていく内容として描いていけると良い。
- ・温泉だけでは付加価値が弱い。温泉+健康づくり・スポーツなどのプログラムが合わさっていると差別化が図られるのではないかと。
- ・ラグーナをはじめ、様々な市の現有資産を活かしていくことが重要。

#### 【2】リゾートとしての環境・雰囲気

- ・リゾートの環境を有していることは生かすべき強みである。
- ・広場や簡易的なオープンテラス等を利用し、ヨガや太極拳等に取り組める、心身ともにリフレッシュできる環境づくりをしていってはどうか。

### 本分野に関する課題

#### 【1】医療の問題（医療費の増大、受診率の低下など）

- ・温暖で雪も少なく過ごしやすいため、介護保険施設の新設が続き、要介護の高齢者の転入が増えている。
- ・市外への受診（管外流出）が増え、病院や診療所の受診率が下がっている。病診連携により、1～2次医療までは安心して受診できる体制づくりが課題である。そのためにも、カルテデータの共有化を進めている。
- ・病院と介護施設の連携も必要である。
- ・母子保健から成人保健にかかる健康情報がある程度一括して収集し、一次医療の予防や疾病傾向などのデータも把握してきた。今後はこれらの情報をシームレスにつなげ、疾病の早期予防につなげるべきだ。

#### 【2】交通アクセスが悪い

- ・国道23号バイパスから市内へのアクセスの改善がされるとよい。
- ・公共バスの充実なども「歩けるようになる街」「歩いて元気になれる街」の一つの施策として考えられる。

## 目的・目標、目指すべき将来像、ターゲット

### 【1】元気になる・きれいになれるまち

- ・蒲郡に滞在して元気になる、きれいになる、(歩ける事で) できなかった事ができるようになる等のコンセプトはとてもよい。
- ・癒しとアンチエイジングの郷推進協議会では、専門家を招いて「歩く」ことによる健康づくりの講演会を行った。今後も歩くというテーマでの活動は進めていきたい。

### 【2】若いまちにしていくべき

- ・人口減少や高齢化により地域の活力が低下している。学校の児童・生徒数が減りクラスが少なくなるのは問題だ。若い世代が転入してくるまちにするべきであり、そのための住宅・土地の供給や雇用先の確保、駅周辺の住宅整備などの環境整備が必要である。

### 【3】40歳代などの働き盛りをターゲットに

- ・企業の社員も健康づくりが大切になっている。
- ・産業を担う現役世代の健康維持が求められている。
- ・スポーツクラブの人气が高まっており、健康意識は向上しつつある。40歳代などの働き盛りをターゲットにした事業展開を図る必要がある。
- ・糖尿病の治療の場合、高齢者がコミュニティとして病院に必要以上に日参している。本当に治療が必要な若い働き世代の治療の中断率が高いことが課題。

### 【4】東三河圏域やその他の地域をターゲットにする

- ・市民だけでなく、東三河圏域、さらに東京や海外からの客もターゲットとして取り込んだらどうか。

### 【5】異分野との連携

- ・医療と工学など互いの得意分野を生かして異分野とのたすき掛けによる連携も考えられる。
- ・本市の先端医療系企業等の事業は良いが、ヘルスケア産業と言っても何でも企業誘致して呼べばいいというのは、地域医療や市民の健康に必ずしも寄与するものではない。きちんとコンセプトを考えて企業誘致や医工連携も図り、市民が安心して利用できる医療、健康に関するもの、サービスを提供してほしい。

## 施策提言、推進方策等

### 【1】再生医療産業の集積

- ・再生医療産業の集積については、地元企業の膝軟骨再生医療や、皮膚と組み合わせれば、蒲郡ならではの新しいビジネスモデルになりうるのではないか。
- ・民間企業にも参画してもらい、国立再生医療センターや再生医療研修センターを誘致する。
- ・予防・健診(例:動脈硬化)と再生医療センターを核としたメディカルセンターの設置が望まれる。リサーチセンターなども考えられるが、ビジネスとして利益を生み出しにくい。
- ・ロービジョンケアのリハビリテーションは、フランス等で実証実験施設があり、研究開発にも取り組んでいるがまだ確立されていない。網膜再生医療や人工視覚等の術後の患者にはロービジョンケアが重要となり、将来の眼科分野の市場としての可能性は有り得る。
- ・眼科の再生医療のリハビリテーション=ロービジョンケアはまだ、あまり進んでいない市場。学識者の関心も高い。iPS細胞での網膜再生医療が成功しても、0.01程度までしか戻らない視力を、眼科医療+福祉用具で0.3~0.4位まで戻せば、健常者として暮らす事がで

きるようになる。障害者も健常者として社会復帰できる街であれば、世界に輸出できるモデルとなり、(家族を含め) 全国からの定住化促進にも繋がる。

- ・再生医療に関する法律の改正で、病院から企業に加工の委託が可能になる。再生医療について市民病院と連携して取り組むことの可能性も高まることが考えられる。
- ・IT 技術を活用した臍帯血バンクなどの細胞バンクをつくるアイデアもある。
- ・再生医療の自家培養を中心に事業化の可能性のある部分を進めるとするのは良い。その上で将来的には、例えばナショナルセンターの誘致など、核となる研究機関の誘致にも結び付けていけると良い。
- ・美容分野についても、将来はマーケットが大きいと思われるが、世論形成やサイエンスとしての裏付けなど、まだ課題は多い。
- ・膝軟骨の街のブランド化の一環として、歩きやすい靴等の販売等もできると良い。そこでは、市民がモニターになったりする関わり方も考えられる。

## 【2】早期発見・予防、健診

- ・眼科分野を強化した総合的な健診（または特定の病気に対する検診）は糖尿病予防等の早期発見にも有用。視機能などの感覚機能はQOLの基本であり、それらに配慮している街というのは他に先駆けた先駆モデルになる。
- ・従来では、大学病院など精密検査のできる施設にしか設置されていなかった眼底精密診断機器等を設置し、従来であれば発見できない初期段階の加齢黄斑変性の患者や糖尿病性網膜症発見できるように検討したらどうか。
- ・早期発見のための先端健診センターの誘致も必要ではないか。
- ・IT 技術を活用して遠隔地診断を行っている事例もあり、蒲郡市でも考えられる。
- ・従来では大学病院送りになっていた難病患者を眼科の健診や検診によって早期発見することにより、地元の病院で早期治療できる。患者自身にとっても、地元の病院・診療所にとってもプラスとなる。
- ・市民にポジティブで楽しい診断を提供して受診率を高めるとともに健康について考える機会を増やし、行動変容のきっかけとして関心を高めることが大事である。そして、海や食を生かして「みんなで楽しく、日本一健康なまち」を目指したらどうか。
- ・スマホのアプリなどを活用して、日常的な健康情報や行動を把握・分析して医療機関に提供することで、その人にあった医療サービスが受けられるようにすることも可能だ。
- ・高齢者にとっては、スポーツ施設に行く＝遊んでいると思われそうで、頻繁に行きづらい。医療機関やリハビリ施設＝必要なことであり、毎日通う大義名分が立つ。

## 【3】地域医療の充実

- ・医療には、命を守る・日常的に生を支える医療と、QOLを支える医療とがある。医師会や市民病院にはまず、命を守る・日常的に生を支える医療を頑張ってもらいたい。
- ・再生医療後のリハビリを地域医療で支えるといった連携が図れると望ましい。
- ・かかりつけ医の強みは、地元の資産がわかる事。働く人にとっても、生活が主役となる医療が必要。医療が生活の中心になってはいけない。
- ・TPP交渉もあり、いずれは混合診療解禁等の動きも考えられる時代が来るかもしれないが、いろいろ課題もある。現段階でも法律の範囲内で、医療と介護を切り離し、保険診療外のQOL向上のための医療や周辺事業を行う事も可能ではないか。

- ・市民福祉への還元の為に、まずは財政を豊かにする手段としてヘルスケア産業の振興という考え方も理解はできるが、観光客や市外の患者向けの施策、すなわち外部経済型の発想だけでなく、市民が健康になる事、適切な医療、予防サービスを受けられることも重要だ。

#### 【4】医療ツーリズム・ヘルスツーリズム

- ・膝軟骨の状態に合わせたトレーニング・運動等メニューの提案をしていけると、再生医療の施術を受けた後のリハビリも含め、全国初の取り組みとなる。健康がまごおり 21 でもそれを検討していけると良いと思う。
- ・膝軟骨の術後の滞在型療養の街を目指すなら、一ヶ月滞在しても飽きない魅力を用意する事が必要。そのためには、海や食等の蒲郡の観光資源に加え、広域連携による魅力の追加も必要になるだろう。
- ・富裕層向けの高額な健康診断も需要はある程度見込める。
- ・ヘルスツーリズムのモニターツアーなどを通年で実施し、ノルディックウォークなどの健康づくりプログラムの提供、クリニックでの総合的な健診、温泉、食などをつなげたサービスを検討したらどうか。スポーツトレーナーなどの人材も必要である。
- ・医療／ヘルスツーリズムも、産業的な発想ばかりに偏るのはよくない。あくまで、適切な医療や予防への取り組みを提供するというのが原点であり、十分な検証や体制作りが必要ではないか。

#### 【5】医療情報共有のネットワーク形成

- ・ヨーロッパでは保険証を IC カード化するとともに、共通診療カードが行われている。
- ・病院・診療所などの連携と医事データの共有は、無駄な検査を減らし、適切な総合診断をするのに有用であり、医療の最適化にも繋がる。医療機関だけでなく。健診センターはもとより、介護施設や福祉施設などとも共有していけると良い。
- ・若い人は、病気の原因を何か 1 つに特定できるが（一元論）、高齢者は原因が複合的となり（多元論）、一つの診療科の検査情報では判断がつかない。医事データの共有により、統合的に判断できるのは良い。
- ・福祉関連事業者の間でも、食事づくりの基準などの刷り合わせが行われている。
- ・医事情報は、医療機関のものではなく、患者本人のものであるべきで、自由にいつでもどこでも本人が活用できる事が望ましい。

#### 【6】産業集積のための都市基盤整備やサ高住などの受皿づくり

- ・スマートウェルネスコミュニティの形成やスマートウェルネス住宅の普及なども国の推進施策となっている。スマートシティとヘルスケアを結びつけていけるように考えていけるといいと思う。実証地域を設け、基盤としてスマートグリッドを整備してはどうか。
- ・産業とヘルスケアが結び付いたような、日本初の新しいコンパクトなスマートシティを目指すべきだ。
- ・スマートグリッドを整備した企業集積地を整備し、ヘルスケア分野のメーカーに新しい技術開発の場所として活用してもらったらどうか。
- ・高齢者の健康長寿や予防は、サ高住でのサポートが無くては難しい。（自分や家族だけでは続かない。）。ただし、自活が基本であり終の棲家にはなりえないのではないか。
- ・サービス付高齢者住宅のビジネスは「医療」＋「介護」。特に介護事業は利益率が低く、不動産業者や IT 事業者には続かないため、資金面の支援の仕組みが必要。銀行の融資は信

用が無ければ得られず、中小の地元工務店では参入が現状難しい。

- ・退職後の受け皿が無く困っている。企業の健保組合のリタイアメントコミュニティを形成していくと良いのではないか。(予防等に取り組み、健康で長生きできるコミュニティ)
- ・ロービジョンケアの一環として、ハンディを抱えた人も安心して住むことができる住宅の供給なども必要だ。

## 推進に向けた課題、方策など

### 【1】人材育成・確保

- ・再生医療等に取り組むには、核となる人材が必要である。再生医療などの先端研究機関を誘致して、そこに専門人材を招致できればありがたい。
- ・課題は在宅医療に取り組む人材育成。在宅介護のできる臨床医を育成していく必要がある。
- ・最新の精密診断機器を導入するためには、検査技師やエンジニアなどのエキスパート人材の確保が課題である。
- ・全国から優秀な人材を引っ張ってくる。
- ・市民の自己管理の甘さ、病院のコンビニ受診などをみると健康意識が低いといえる。小中学校のうちから健康教育、患者教育を行って健康マインドを高めることが大事ではないか。
- ・民間企業と協働で子どもの料理教室や健康教室などに取り組んでいる事例もある。市民自身が健康づくりを考えたり、再生医療のまちづくりの意識を持てたりするような行政サポートがあるとよい。
- ・市内には全国から学生を集めて先進的な教育に取り組む中高一貫校等もあり、蒲郡にとって大きな人財となりうる。彼らが将来、蒲郡をホームタウンとして自慢できる街にしていくべき。
- ・豊橋など周辺地域で取り組んでいない部分に力を入れていき、役割分担すること。一つの街で全ての医療をまかなうのは不可能。周辺地域と住み分けながら、周辺からも患者を呼び込む事を考えた方がよい。

### 【2】プロモーション、情報発信

- ・今、国でも新たなアイデアを必要としており、自治体の動きは積極的に情報を出していくと良い。国や県のイベントや特区などの政策説明会にも積極的に参加することで街の姿勢が徐々に浸透していく。
- ・優秀な人材を外部から引っ張ってくるために、「再生医療などヘルスケアを重視したまち」「ロービジョンケアなど、眼科に特化したまち」など、特色のある地域イメージを外部に売り出していくことが必要である。
- ・全国区の健康産業が立地していること、ノルディックウォークなどの取組を進めていることを、市民はあまり認識していない。地道に市民の機運を高めていくことが大事。
- ・市内先端企業の取り組みや製品を市民も市内外の企業もあまりよく知らない。官民が連携して積極的にPRして行くことでまちのイメージにもなっていく。

### 【3】広域連携

- ・人口8万人の規模で全て完結することは難しい。蒲郡市が孤立しないように、広域の視点から機能の住み分けなども考えていく必要がある。

- ・マーケットとしても広域に展開するほうが可能性が広がる。
- ・蒲郡市は、西三河と東三河の接点にある。事業内容ごとに、広い視野を持って両方と付き合い合っていくべき。
- ・豊橋や名古屋等都市部とは条件が異なる。それぞれの強みを活かし、医療において互いに補完できるような協力体制を作ることによって市場性が確立できるのではないか。

#### 【4】その他

- ・医療ツーリズムは、検査結果の数値の判断や、日常的な治療との方針の違いなどが問題となり、クレームが多いことが課題となっている。
- ・民間の発想を生かすために、民間が参入しやすいような開発行為などに関する規制緩和を行うべき。